

羽黒・芸術の森

庄内 ふいはふいは

10代と考える、庄内のおもしろさ④

Supported by
庄内広域行政組合、山形県庄内総合支庁

ovenKato
加藤 博紀さん

ovenKato
加藤 あさ野さん

月山を望み、木や草花に触れ、
アートや食事が楽しめる羽黒・芸術の森。
高校生や大学生など地域の若者とも協働し、
楽しみながらこの森の活かし方を探る
3人の運営メンバーにお話を伺いました。

今井アートギャラリー 館長
秋野 わかなさん

鶴岡北高校1年
たける
佐藤 壮さん

羽黒・芸術の森って？



鶴岡市出身の画家・今井
繁三郎さんの作品を收藏・
展示する「今井アートギャラリー」、
季節のおいしい料理をいただくこと
ができるレストラン「ovenKato」が
ある、鶴岡市羽黒町の小さな森です。

第二次世界大戦が終結した1945
年に、「月山が見えるところで子育
てをしたい」とご家
族を連れて帰郷した
今井さんが、暮らし
と作品制作の拠点として拓いたのが、
この森の始まりだそうです。メタセ
コイアやドイツトウヒなど、この辺
りではなかなか見ることができない
木々を植えたり、江戸中期の蔵や、明
治期の鶴岡裁判所の執務室を鶴岡市
街地から移築したりして、現在のよ
うな佇まいをつくり上げてきました。

今井繁三郎って どんな人？

「たくさんキャンバスを並べて、四
六時中絵を描いていましたね」と振
り返るのは、この森とともに暮らし
た孫のわかさん。「個展を開き、
絵を売って生計を立てていたので、
描かないことには暮らしていけない
わけ。画家とはいえ、当然筆が進
まないこともあり、そんなときは大
体庭に出て植物や動物の世話をして
いました」。旧制鶴岡中学校（現鶴
岡南高等学校）時代から絵画、特に

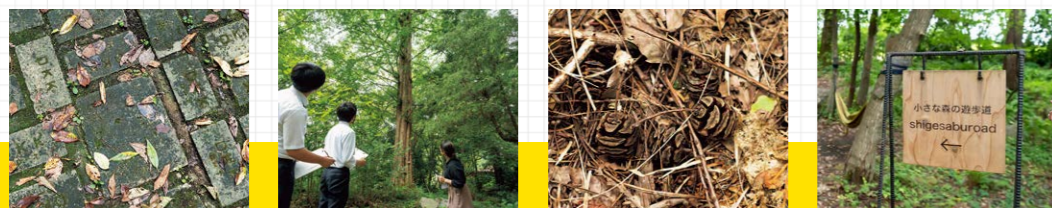


館内には、実にさまざまな作風の絵が並んでいる。

洋画に興味があり、卒業後画家を志
し上京した今井さん。美術雑誌『美
之國』の編集長業、自由美術家協会
の立ち上げと奔走しながら、作品制
作に精力的に取り組んでいましたが、
第二次大戦を経て帰郷。以降91歳で
亡くなるまでこの森で絵を描き続け
ました。「否定という行為はほとん
どせず、なんでも受け入れるような
人でした。
絵に限らず
さまざまな
ものからイ
ンスピレー
ションを得
て、自分の
表現に取り入れていましたね」。世
界情勢、自己の心情や境遇など、そ
の時々で関心が強いものが描かれる
今井さんの絵は、作風が固定的では
なく、そのほとんどにタイトルがつ
けられていません。「先ほどの、否
定をしないという話にもつながりま
すが、タイトルをつけなかったのは、
人それぞれの解釈で絵を楽しんでほ
しいという思いからなんです。タイ
トルをつける場合も、会場に並べて
みてじっくりこなければ違うタイト
ルをつけたり、柔軟に考えていまし
たね」と同じく孫のあさ野さんは、
懐かしそうに話してくれました。



祖父が生きていた頃は、
鶏を放し飼いにしていたことも
あったんですよ



山大農学部や東北芸工大、羽黒高校など、地域の若者たちとともに整備してきた遊歩道。



森は、誰に受け継がれた？

3

今井さんが亡くなった2002年

以降、わかかなさんとともにこの森に暮らした母・木草さん（今井さんの四女）が中心となり、今井繁三郎美術収蔵館（現今井アートギャラリー）を運営してきました。しかし、12年後の2014年、継続運営が困難になり休館に追い込まれてしまいました。「母のサポートをしようにも子育てに追われ手が回らず、一時は閉館も考えました」。困ったわかかなさんは酒田で暮らすお兄さんに相談し、親



絵はもちろん、展示されている今井さんの収集物も興味深いものばかり。「気に入ったものを知ってほしいという思いも、すごく強い人でした」。

族や所縁ある人たちと今後について話し合う場を持ちました。「私たちを含め13人の孫がいて、うちの兄妹以外は首都圏にいたんですが、夏休みには決まってみんなで集まって過ごしました。思い出の場所だし、これからも集まりたいし、なんとか続けていきたいねという話になって」。ふとしたことから白羽の矢が立ったのが、当時東京で博紀さんとビストロを営んでいた、あさ野さん。「祖父が生前、『ご飯食べたり、お茶飲んだりする場所があるといいなあ』と言っていたという話になり、飲食店は人も呼びやすいいいねと。幸い子どもも自立していましたし、無理な話ではありませんでしたが、悩みましたね。寝ずに考えたのは、あのときが初めて。まあ一晩で結論は出たんですけどね」。

休館を経て、どう変わった？

4

こうして、あさ野さん・博紀さんの移住が決まり、「羽黒・芸術の森」という新たな名前前で再び動き出したのが2016年のこと。今井繁三郎美術収蔵館は「今井アートギャラリー」となり、わかかなさんが館長に

就任。受付業務をボランティアの方にお願ひするなど、無理のない運営体制も整備しました。「協力を申し出てくださる方がたくさんいて、『任せていいんだ』と気持ちが一気に楽になりましたね」。併行して始まったovenKatoのオープン準備でも、「たくさんの方が力を貸してくださった」とあさ野さん。「2年間ちよこちよこ通いながらアトリエスペースをお店にしていたんですが、水も電気も止まっている中で寝泊まりしながら手伝ってくれる学生さんもいて、本当にありがたかったです」。



これから、森はどうなる？

5

音楽ライブや写真などの作品展示、書道、植物に親しむワークショップなど、近年さまざまな形でこの場所を楽しむ人が増えていて、それは運営に携わる3人が描く未来にもつながっているそう。「いろんな人が関わってくれて、ともに歩んでいける場所にした」というのが一番で、少しずつそうなっている気がします」とわかかなさん。「いつも話し合っていることだから、大体同じ」と前置きをしつつ、博紀さんとあさ野さんも今後について話してくれました。「レストランという形式にこだわらず、今井繁三郎がつくり上げてきたこの場所を、次の世代につないでいきたいです」。「血のつながりがなくても、この場所を気に入ってくれて、何かやりたい、つないでいきたいと思うてくれればそれでいいし、そう思ってもらえる場所にしていきたいですね」。



「できるだけいろんなアイデアを受け入れて、たくさんの人と一緒にこの森を楽しんでいきたいですね」。



羽黒・芸術の森

住／山形県鶴岡市羽黒町仙道字一本松5-175
電／0235-62-3667



X(旧Twitter)アカウント<@shonaigo>
「庄内さ、いGO!」
庄内暮らしの魅力、
移住定住情報を発信中!

庄内地域移住交流推進協議会
事務局：山形県庄内総合支庁総務企画部総務課連携支援室

取材後記



「国なき民Ⅱ 飢餓」の絵がとても印象的でした。描かれた女性や子どもが伸ばした手から、世界中の飢餓による苦しみをなくしたいという今井さんの願いが感じられ感銘を受けました。(佐藤)

有名画家の絵だけではなく、子どもが描いた絵もたくさん見て、自分の表現に活かしていたというお話から、既成概念にとらわれず物事をいろんな角度から見ることの大切さを学びました。(澁谷)